

Mastery for Service?

Hans Peter Liederbach

近頃、学生から「社会に役に立つことを勉強したい」と言われることがある。一見して、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”にぴったり合う、素晴らしい発想であるかのようだ。しかし、この発想には一種の曖昧さが潜んでいる。いうまでもなく、「社会に貢献したい」という気持ちは高く評価すべきだ。しかし、学習・勉学とは社会貢献のために行われる営みなのか。さらに言えば、勉学とは、ある目的のための手段であるべきなのか。

今年のノーベル医学生理学賞を受賞した東京工業大学の大隈良典栄誉教授が、朝日新聞の取材にこう語った。「この研究をしたら役に立つというお金の出し方ではなく、長い視点で科学を支えていく社会の余裕が大事」。国は近年、成果がすぐに見込めそうな研究に競争的資金を重点的に助成している。基礎研究には競争的資金は見合わない。こうした傾向に対する苦言であろう。教授は、ノーベル賞の賞金を若手研究者の支援に活用するという。「国が産業応用など実用的な成果を重視するあまり、その土台となる基礎研究力が低下するのではないかという危機感」が背景にある。単なる社会的効果を目指す勉学・研究は、結局のところ表面的な結果に至る危険性をはらむ。政治、社会、経済界の要求からの自由がなければ、勉学・研究の名に値するものは成立しないだろう。

ヨハネによる福音書8：32に「真理はあなたを自由にする」という言葉がある。これは社会学部のモットーでもある。この「真理」とは、元来は宗教的な真理だが、現在の私たちが携わる勉学・研究が追究する真理とも解釈できよう。そして、この意味での真理がもたらす自由は、結局のところ、既存の政治・経済・社会的状況を批判的に検討する自由でもあるはずだ。なぜなら、少なくとも広義の人文科学における真理を目指す勉学・研究が考察対象にしているのは、まさにこの政治・経済・社会だからである。それゆえ、「社会に役に立つ勉学」とは、単にその政治・経済・社会の枠内での勉学ではなく、その枠を超えるものでなければならない。

「社会への奉仕・貢献 (Service)」をめぐる問題は、結局はそのための「練達 (Mastery)」をいかに理解すべきか、という問題だ。論文が書きやすく、研究費も得やすい「流行」のテーマに転ずることなく、ひたすら自らの研究を貫いた大隈教授のように、今自分に何か引っかかる問題があるなら、その問題にじっくり付き合ってみてはどうだろう。練達には時間が必要なのだ。

(社会学部教授)